ひめしまむら 姫島村 総括会議

ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」。第10弾となる姫島村編が1日、同村の離島センターやはずなどで行われた。「水産業」「観光資源」「島興隆」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出された「ミライキーワード」を軸に、将来も持続可能な地域をどうやってつくっていくかについてさらに議論を深めた。基幹産業である水産業が衰退し、島の人口が減る現状がある中、まず求められるのは、自分の子どもたちが残りたくなる・帰りたくなる島をつくること。姫島という島名自体に希少価値があり、数々の貴重な資源もある。この資源を生かして元気を生み出すことが、その一歩になるのではないかと提起された。そのためには、島民が目的を共有して改革に取り組むこと、島民と島外の人が一緒になること、イベントをやらされるのではなく主体的に取り組むことーなどが重要だと話し合われた。参加者はこの日をスタートとして、新しい姫島村の魅力を創造していくことを誓い合った。

■ウェブ http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社 共催／姫島村 姫島村商工会
協賛／国立大学法人 大分大学 ㈱大分銀行 ㈱NTTドコモ九州支社大分支店 日本たばこ産業㈱熊本支店 姫島車えび養殖㈱

「水産業」分科会まとめ

漁獲量が少なくなってきている、漁獲高も減っている、漁をする人が減っているという厳しい漁業の実態がある。こういう現状の中で基幹産業である水産業を守っていき、次の世代につなげていくにはどうすればいいかを考えた。漁業の仕事をつくるには、やはりもうけることが大切。その手法として生産、加工、販売を一体的に行う6次産業化や姫島という名前を産地として確立させるブランド化ができないかの議論をした。その結果、キーワードとして「改革」を選んだ。出席者全員が、今のままでは水産業を未来につなぐことが難しい、新しい一歩を踏み出さなければならないと認識しており、取り組んでいる内容を改革して、未来が開けるようにしたいと一致した。

"ミライキーワード"
改革

「観光資源」分科会まとめ

キーワードは「つなぐ人」。分科会では、観光の現状や課題を話し合い、目指すべき姿の姿を探った。子どもの頃にやっていた磯遊びなどをできる場所が減っているが、今ある観光資源を守りながら観光を発展させていきたいという課題が浮かんだ。そのために提案されたのが、バスなどがない不便さを逆手にとって歩いて楽しい仕掛けをつくったり、フェリー利用をポイントカードにしたり「また来たい」と思わせること。姫島は観光スポットや食べ物だけではなく、その中で人が動く。話をすれば楽しい人が多いので、島の人と観光客、人と人をつなぎたいし、同時に島民間でも十分な連携ができていないので、島の人と人をつなぐ人がいればいいと提起された。

"ミライキーワード"
つなぐ人

「島興隆」分科会まとめ

キーワードは「脱・やらされた感」。イベントなどを何となくやらされている状況を脱して、自分たちから発信していこうという思いの表れ。盆踊りは伝統としてやっているのか家光としてやっているのかあいまいになっている。目的を明確にしてやるべき。観光もただ来島者の数が増えればいいのか。例えばバスツアーでも島のいい所を知らないまま帰ってしまっている。島に詳しい人がガイドできないか、宿泊客に夜楽しんでもらうようなことができないかなど提案された。ボランティアやっても長続きしないので利益が出た組みをつくる。もしくは自分たちが好きで楽しくやっていくようにならなければ続いていかない。やらされるのではなく、やろうという思いを強くする必要性で一致した。

"ミライキーワード"
脱・やらされた感

ダントツでいい島の名前

人のありようがテーマ

小田 キーワードを見ると「改革」「つなぐ人」「脱・やらされた感」。幅広い分野にわたって話をしたのですが、方向性が同じで、人のありようかなと感じます。働く場がない、人が帰ってこない、人口が減っている。水産業の低迷が原因だと一般的には言われています。しかし姫島には、水産物や豊かな自然、歴史や文化、伝統など非常に素晴らしい資源があります。まず姫島が持っている良さ、価値をあらためて確認したいと思います。須賀さんは車エビの養殖をしていますね。姫島の代名詞のような存在ですが、具体的にどんなところがすごいのでしょうか。

須賀光 姫島の車エビは間違いなくおいしいので、自信を持って買ってもらえると思っています。

小田 甘みがあって味が濃いという他にない優位性があるとも聞いています。魚でもそういう良さがあるらしいですね。基本的に一本釣りなので魚が傷まないとか。カレイ、タチウオ、タイなど素晴らしいものを持っています。次に姫島観光の良さをお聞きしたいと思います。

木野村 ジオパークに代表されるように火山の噴火でできた島です。ジオパークが観光の新しい切り口になったことがメリットだと感じています。それに加えた不思議や周遊船、村歩きなどで、島の名物おじさんや名物おばさんらとのつながりを大事にしていくことらこのキーワードになります。そういうことをどんどんPRしていくべきなのかと思ってます。

小田 分科会ではそれぞれが考える島の"売り"を紙に書いていましたが。

木野村 観音崎や灯台、海水浴場なども家族連れでもっとにぎわうようにしたいですが、PRが足りないのかなと。外外の人が知らないということが一番のネックになっています。

小田 島興隆分科会では、観光なのか供養なのか目的がはっきりしないとの話もあったようですが、村外によく知られた盆踊りと、それも含めた島全体の魅力を教えてください。

小岩 盆踊りの魅力を一言で言うのは難しいですが、姫島は人がよりいっぱい人と人とのつながりがあればもっと面白い観光ができていくのかなと思ってます。やらされた感があるのは話ではいろんなイベントを自分たちで楽しむものになっていないというのが正直なところ。その辺を変えていければもっと面白い島になるのかなと思います。

外の目で見るから評価

小田 消費者の身近にいる外部の人の目から見て、姫島の水産物の魅力は何ですか。

足立 問い合わせが多いのが車エビ、タチウオ、姫島かれいにワカメ、姫島うにです。大分県産の車エビを通常販売していますが、「姫島の物がないの？」と産地を特定して尋ねられるのは、他には佐賀県、城下かれい、米水津くらいです。数少ない産地を限定される場所で、定置網をやってなくて一本釣りだけで漁をしていることも認知が進んでいないので、そこも含めて姫島ブランドを進めていってほしいです。

小田 旅の面で見た魅力は何でしょうか。

薗田 「旅行に行って何が一番良かったですか」と聞くと、食事や宿など挙がりますが、また行きたいと思う理由の一つとして「あの人に会いたい」とよく耳にします。あのガイドさんがすごく楽しくて、また会いたいとか。分科会で姫島の魅力は人ですと皆さんが言っていましたので、魅力発信の一つの切り口として観光客が増えたらいいなと思いました。

小田 やはり「人は重要なキーワードのようですね。そういった人の暮らしを見つめているのが弊社の調査支局です。取材してみていかがでしょう。

中谷（悠太＝大分合同新聞国東支局長） 昨年紙面で取り上げた姫島麒はそても面白くて、取材の中で竹工芸を研究している人に話を聞いたら、島の中で独自の進化を遂げ、デザインも豊富で独特なものだといっ ことでした。外の人の目で見るからこそ評価されるものがあるというのが実感です。

しょうしゃぶを商品に

小田 非常にいい素材を持っている中で、何か付加価値を付けて高めていこうという議論がありました。どうやって売り込むかで、6次産業化やブランド化の現状はどうでしょうか。須賀さんは凍結のエビなど新たな取り組みをしているそうですが。

須賀光 今まで車エビの冷凍真空パックを販売していたんですが、去年から解凍して剥し身で食べられる製法を見つけました。エビがない時期に5旅館などが使っていただけたかと思っています。エビのしゃぶしゃぶはまだ商品化されてはいませんが、うまくいけばいいです。

小岩 ブランド化はテーマでして難しいと思うんですよ。真空パックで剥し身で食べられるのがブランドになるのかというところから落とし込んで考えないといけない。足立さんに聞きたいんですが、どんな商品が売れるのか、どんな商品を作ればいいのですか。

足立 淡路島で作られている明石ダコ生茶漬けセットを取り扱っています。淡路島活性化推進委員会さんの商品ですが、今回のようにご会議のきっかけ始まって流通に乗っています。姫島産の車エビを、例えば糀（こうじ）屋さんの塩こうじで漬け込んだセットを作ってみてはと分科会で話をさせてもらいました。素材や価値観で、素材の良さを引き出すことと、漁獲量の少ない素材に付加価値を付けた高単価商収益のものの引指す方向性だと思います。

小岩 作ったら買ってくれるのなら作りますね（笑）。作り手と買い手と売り手って、みんな気持ちがばらばらなんです。作りたい側が作りたいと思って作る商品が本当に消費者にとっていいものかどうか分からない。売りたい側が欲しがる商品を作ることが必要だと思います。

小田 木野村さんのところも加工でマイタケまりんとうを作っていますね。

木野村 作り手・売り手・買い手をつないで、買い手の欲しい物を作り手も作り、売り手が売るというところでもつなぐ人が大事なのかなと思うんです。お客さんの声を取り入れて。うちのかりんとうも最初は全然ダメと形が違ったんですよ。パッケージとかも。声を聞きながら改良を重ねての今の形になっているんで。今日、パッケージに小窓を付けた方がいいとアイデアをいただいたんで参考にさせてもらいたいと思います。

小岩 本当に売れているのでぜひ買って帰ってください。

同じ名前の所が少ない

水産業／アドバイザー
Wataru Adachi
足立渉 さん
大分市出身、36歳。トキハ本店食品部塩干・生鮮3品バイヤー。大学卒業後、トキハ入社。大分市打一品乗京営業所に5年出向し、現在に至る。

小田 姫本さん、今までの話でいかがですか。

姫本 情報では姫島を知っていましたが、初めて訪れてみて、やはり来てみないと分からないところがありました。情報を発信する上で特異性を大切で、名前を覚えてもらわないといけないですが、姫島は断トツでいいと思うんですよ。名前がまずかわいいこと、同じ名前の所が少ない。黒島は有人離島だけで8島、大島は16島ある。姫島は覚えやすいし、ストーリーがくさんあってひかれます。女性の一人旅が増えているそうですが、そういう人は、その島にしかないものを探して来ているんだと思います。その素材はたくさんあると感じました。

小田 響きもいいものがありますし、いろんな使い方ができるかなと。もっと情報発信できるという気がしますよ。ぜひ取り組まれていますか。

小島（直之・島興隆分科会） 役場や商工会はホームページで情報提供していますが、随時更新するとか、見る人をひきつける感じでは今のままだとちょっと思うんですね。フェイスブックやブログなど個人的にやっている部分はありますが、まだまだスタートしていない感じです。

小田 小岩さんは姫島宣伝隊ですか。

小岩 勝手に名乗っています。造船業をしていますが、水産業の衰退があって、獲っても物が売れない、高く売れない、付加価値を付けられないのが現状。じゃあ自分が出て PRできたらと考えて全国の催事を回ってるんですよ。なかなか大変です。大分、北九州から出ると姫島の盆踊りとか全く名前が通らない。だけど自分がPRするストーリーの中で「お姫様の島」と伝えると、それだけで押し込めるんですよ。島名という特徴や武器は大いに使っていくべきです。情報発信ではストーリーを作って売り出すと面白いと思ってます。

小田 ストーリーの話が出てきました。幻の2日ひじきも一つのストーリーですね。

小岩 他のヒジキとどう違うのという話になった時、自分のヒジキはこさえてきたものを引き出すことが大切なのかなと思ってます。

島興隆／若手リーダー
Naokazu Koiwa
小岩直和 さん
姫島村出身、37歳。姫島宣伝隊、姫島商工会青年部長。会社員を経て造船所を継ぐため帰郷。2011年から特産品販売を通じて姫島をPRしている。

ファンをつくるツアー

小田 姫本さんからいろんな島の取り組みをご紹介いただきます。

姫本 沖縄で、捨てていたイカを炊き込み飯の素にしていますが、それは外部の専門家の人とうまく連携してやっています。連携が苦手という声が観光資源分科会で出ていましたが、連携をうまくやっている島が商品をうまく売っていますし、外の人に正しく理解してもらうとファンが増えるんですよ。ファンを増やした結果物が売れているというのが多いですね。エビは安い物ではないし、下手に安くするともうけにもなりません。高く売るためにはストーリーが必要です。隠岐諸島の海士町（あまちょう）の人口は2千人台ですが、1割くらいがIターン者。町長と役場の職員が給料をカットしてCASという高価な冷凍機器を購入し、特産の白いかの剥し身を東京などに出荷しています。島のファンをつくろうというツアーも組んでいて、島の人が島を案内したり島の人たちと交流した結果、リピーターがものすごく増えているんですね。リピーターが移住するともあります。

恒賀 魅力とは何なのというところに最後はなるんだと思うんですよ。姫島には基本的にもじもじない、若い人が増えていると思う。いろんな可塑性や可能性があるんです。メニューの増やし方、見せ方、選び方、暮らし方、ふるまい方、ライフスタイルがあると思います。そんなのがいろんなやつから出てくる。それが一つの可能性です。これを議論のテーマにしていただければと思います。

小田 例えばどんな可能性がありますか。

姫本 可能性って自分では分からないじゃないですか。逆に島の人はどうなんだと楽しんでいるんですよ。

小岩 本当に仲間と飲んだりするのが楽しいんですよ。観光客と一緒に飲むと絶対楽しいと思う。だけど今島がテーマにしている観光には方向性がないんですよ。その方向性をみんなで考えられる場所がある。

木野村 商工会青年部でやっているビーチサッカーが10年目になりますが、泊まり客を対象に夜バーベキューをやって青年団と交流をしていました。年々子どもたちは増えてくるんですが、大人が少なくなってきました。島の人は村外の人と飲むのを楽しみにしている部分もあるので、そういう場を設けるといいのかなと思います。

「泊まれば分かる」PR

小田 須賀さんの楽しみは。

須賀光 私も飲むのが好きなので晩酌をして楽しんです。たまに友人の家で飲んだりします。

幸せのためにやってやろう

恒賀 いろんな人が思っている島の良さがどうやったら伝わるかにポイントを置いた方がいいと思うんです。実は姫島村の広告宣伝費はゼロ。離島振興の一環で行政が作ったパンフレットはありますが、行政がつくるとロクなものはできない。どうやったらより魅力的なものができるかの議論をしてもらいたいです。

姫本 どうやったら魅力を伝えられるかは、まず自分たちが自分の魅力を知ることが必要ですね。今はお金を掛けなくてもいろんなツールがあるので、先進地が何を使っているかインターネットで調べれば探せるんです。検索して見つかりやすいところはうまくやっているわけですね。他の事例をたくさん知らないとできることも分からない。島は外に行かない限り他の事例にも出合いにくいので、どんどん勉強していくのがいちばんじゃないかと感じました。

薗田 姫島には大分のお客さまが多い印象がありますが、取っ掛かりとしては車エビを食べたいというのが一番です。その中で観光客が来ていただいた時に、七不思議があるんですよ。観音崎灯台とか、県内の人もまだ知っている人が少ないのが現状です。おいしい車エビを目的にまず来てもらって、姫島の名所も知ってもらい、島の人と飲み食で絆をつくればコミュニケーションになると思います。

観光資源／アドバイザー
Kana Sonoda
薗田花奈 さん
熊本県出身、23歳。JTB九州大分支店営業課。西南学院大学を卒業後、同社に入社。一般法人、組織団体の営業を担当し、法人営業も行っている。

屋久島も課題抱える

小田 リピーターをどうつくるかということですかね。

姫本 リピーターでいうと、世界自然遺産登録後の屋久島はすごくお客さんが来るんですが、屋久島のイメージは山の上の鹿文杉で、たいてい山に登ってそのまま帰るんです。リピーターが少ないという課題があって。リピートしている島の特徴は、人の魅力にはまってしまうこと。屋久島も山以外の場所の魅力を知ってもらうリアーをやり始めています。

木野村 観光は一番難しいというか。観光客のニーズに応えるのか、もともとあるものをつなぎ合わせたら観光客のニーズにつながるのか、姫島でできるといえば後者の方だと思うんですよ。素材は素晴らしいものがあるので、うまくつなげていく仕組みも人もPRも足りないと思います。

小田 分科会で出たのは、島が好きだから自分たちも島を楽しむということ。自分たちが楽しむことができなかったら観光客にも伝わりません。トレジャーハンター実行委員会の常盤（真人・島興隆分科会）さんも参加していて、触れ合いながら島を回ってもらうことが島のファンづくりにつながって、ファンをつくらないとリピーターにつながらないと思うんです。観光の目的をみんなでつちゃんと決めないと、ファンを増やしたいのか、人が来るだけでいいのか、方向性にずれがあるとうまくまとまらないと思います。

島興隆／アドバイザー
Kentaroju Tsunega
恒賀健太郎 さん
中津市出身、37歳。地域連携研究コンソーシアム大分講師。2011年から大分県生活環境企画課でエコバーク各担当。研究テーマは地域資源分野。

恒賀 5～10年先にどんな島であってほしいか。これは小岩さんの話に直結すると思いますが、10年後にどんな産業や観光資源が残っているかの保全の問題。屋久島の問題は指針・目標がなくて お客さんだけ呼ぶからです。みんなが同じ方向を向くことが一番欠落していると思います。分科会は「脱・やらされた感」でまとまったんですが、やらされる「受け」から「攻め」に切り換いていくカを発信するということでした。他の分科会のキーワードもリンクしていると感じます。

小田 10年後どんな島であってほしいですか。

須賀光 ちゃんと経営できていればいいですね。そこで少しでも島に貢献していけたらいいと思います。

西村（敏之・水産業分科会） 今以上に良くなっちょけば一番いいんやろうけど、仕事場もっぱいやさて、普通に生活できる環境が整っていればいいですね。

大海（満幸・同） まあ、がっつりもうかればそれに越したことはないが、みんなが和気あいあいと上を向いて歩けるように。今、上を向いて歩く人があんまりおらんような気がするんやけど、少しでも上を向いて歩けるような島にしたい。島全体がそういう方向にいければいいんじゃないかと思います。

小岩 自分の中で10年後の目標はないんですよ。分科会で言ったのは、自分たちには子どもがいるんで10年後とかではなく、子どもたちが帰ってきたい時に帰って来られる場所があるのか、ないのか、帰ってきたい時に働く場所があることは、自分たちが最低限やっていかないといけないことだと思います。

木野村 子どもや孫の世代が残りたいと思えるような島にするのも僕らの仕事じゃないかなと思います。

常盤 とにかく姫島の人口を増やしたいですね。そのためにみんなで何がしたいかですよね。

熱意にひかれて集まる

小田 全国的には無人島化もあるそうですね。

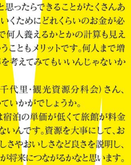
姫本 2050年くらいには今から1～2割は減るとされています。現在四百数十島有人離島があって、半分くらいは500人以下の島。2千人もいる所は少なくて、しかも自治体としてこ、だからこそやってこれたのかなと。私の地元の日田市はいろんな材を吸収していて、その日材は自治体じゃないのでできないことがあって、姫島は今から自分たちでやろうと思ったらできることはあるんだと。2千人生きていくためにどれくらいのお金が必要で、この産業で何人養えるかとか、具体的な見やすい規模ということもメリットです。何人まで増やしたいか基準を考えてみてもいいんじゃないかと思います。

小田 安西（千代里・観光資源分科会）さん、お話を聞いていていかがでしょうか。

安西 姫島は桔梗の単価が低くて旅館が料金を高く取りきれないんです。資源を大事にして、お客さんに魚の新しさやおいしさなどを説明し、知ってもらうことが将来につながるかなと思います。

小田 青年団長を6年、女人数が減って活動できる範囲が小さくなってきてるんです。雇用が増えれば若い人がもっと帰ってくるんでしょうが難しいかなと思います。ます人口が増えれば、若い人が帰ってきて、青年団も大きくなって、活動範囲も大きくなると思います。

木野村 分科会でも話が出たのですが、行政とエビ関連会社に求人がなければ帰ってこない。もっと僕ら民間が頑張って雇用の場を増やしていくことが大事なんじゃないでしょうか。



観光資源／若手リーダー
Koki Kinomura
木野村光紀 さん
姫島村出身、42歳。木野村ヤンマー農機社長。姫島ビーチサッカーチーム、姫島観光LLP島の風。姫島林の麓などを立ちあげ、活性化を図る。

姫本 どこの島でも仕事がないという話を聞きます。それではしんどの島で人が減っている一方でもの すごく力のある若者が会社を興して仕事をつくっていくパターンもあるわけです。鹿児島県の甑（こしき）島では20代の若者が島で米や豆腐を作ったりしていて、その人の熱意に引かれてまた人が集まっています。既に小岩さんたちも商品をつくっていますが、それが未来へ一番重要なことだと思うんですね。新しいことをやりたいと思ったときに育てていける機運をつくっていただきたいなと思います。

小田 そのためのキーワードが分科会で出されたものですかね。そこに姫島村出身の若者が帰ってきたいと思えるような島にしたいと。姫島は若者が集まってくる島にしたいと。

大海 今後どうしていくべきかを話せたのが良かったです。自分の意見も言えたし、みんなの意見も聞けたので財産になった。この話を島民全体に聞かせてあげたいですね。

西村 同級生の小岩君がよくしゃべるのが印象的でした（笑）。

安西 女将（おかみ）の会も高齢で替めるところもあると思います。もっとやる気を出してやっていきたい。会のメンバーに今日の話を伝えて"火"を付けたいです。

追崎 みんな考えていることが近いなということが印象的でした。

須賀（猛明・観光資源分科会） 島にいかに子どもを残すかで、みんなが考えていることが分かった。行政の立場からどうサポートできるかの意見も聞けたので良かったです。あまり行政は前に出て欲しくない。民間の人がやりたいことの一歩にいかできる役割であればと思います。

桜井（絵理・島興隆分科会） とても勉強になりました。求めるところは全部同じで、伝統を残しながら若い世代に伝えていきたい。人と島、両方に潤いをもたらすため、やらされた感からやめてやろう感になればいいと思いました。

小島 私が行政の立場なんで、キーワードの「脱・やらされた感」を記事にしていかに心ご配いただいたんですが、カットするところはありません。全て載せていただき、それで気持ちが楽になったり、やらされた感を持っていた人が頑張ったりで、これからの島づくりに生かしていければいいなと思います。

常盤 最年少でしたが、テーマを持ってお酒を抜きにして村民と話し合う場がなかったので今日は楽しかったです。姫島にハッピーがかよるためにの、みんながどういう方向を向いていったらいいか議長に講評を お願いします。

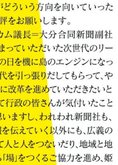
長野（敏一・ハピカム議長＝大分合同新聞副社長） 今日ここに集まっていただいた次世代のリーダーの皆さんが、この日を機に島のエンジンになって、の世代、下の世代を引っ張りだしてもらって、やってやろう感のために改革を進めていただきたいと思います。議方として行政の皆さんが気付いたことも多々あろうと思います。われわれ新聞社も、今までのように情報を伝えていく役割にも、広義の意味のメディアとして人と人をつないだり、地域と地域をつないだりする「場」をつくる努力を進め、姫島のハッピーのために尽力したいと思っています。

今日の話がきっかけに

小田 姫本さん一言お願いします。

姫本 人がいるので、島を変えるのはいつからだって始められますね。時間が掛かるということは考えていただかないといけない。子どものためにと全島が共有していることだと思うんです。そのためだったら、今までなかったことでも取り組んでいいので、ぜひ動いていってほしいです。私たちもこれを機会に、姫島の今後の動きを伝えさせていただきたいと。他の島の事例を提供していきたいと思います。

小田 短い時間でしたが、こうして皆さんが話し合えたことが財産になるのではないかと思います。いろんなことが手付かずになっており、島にはまだまだいろんな可能性が残っている。「島は今背負っている」という言葉も聞きましたが、まさに姫島は青春時代に入ったのかなと思います。いろんなも や もやを抱えながら、悩みながら、それが明日への力になり、次の世代へとつながっていく。そんなきっかけに今日の会議がなればうれしいです。どうもありがとうございました。



総合コーディネーター
Kainosuke Oda
小田圭之介
1993年入社。47歳。整理部、社会部、湯布院支局、別府支局編集部を経て梅溝団長。島の若手はこでもエネルギッシュ。無限の可能性を感じました。

これまでのハピカム開催地／平成23年度 宇佐市（10月）津久見市（3月） 平成24年度 九重町（6月）日出町（9月）国東市（12月）臼杵市（3月） 平成25年度 竹田市（6月）日田市（9月）中津市（11月）東京（1月）姫島村（3月）

養殖・活きメ冷凍真空パック車えび

番号	内容量	尾 数	価格(税込み・送料別)
021	200g	4～5	1,200円
023	200g	6～7	1,100円
025	200g	8～9	1,000円
027	200g	10～11	900円
029	200g	12～13	800円
031	200g	14尾以上	700円

おさしみ用凍眠凍結養殖車えび

番号	内容量	尾 数	価格(税込み・送料別)
121	200g	4～5	1,300円
123	200g	6～7	1,200円
125	200g	8～9	1,100円
127	200g	10～11	1,000円
129	200g	12～13	900円
131	200g	14尾以上	800円

有頭えびフライ（養殖）

番号	内容量	尾数	価格(税込み・送料別)
304	190g～210g	4	1,200円
305	190g～210g	5	1,200円

姫島車えび養殖㈱
〒872-1501 東国東郡姫島村2112-30
※お支払いは、商品と別に郵送するご請求書が到着後10日以内にご入金ください。
※1件につき送料1,150円(クール便)が必要です。
ご注文は
TEL.0978-87-2119
FAX.0978-87-2051
ホームページでもご購入いただけます！
http://www.kurumaebi.jp/
携帯・スマホからもご利用可能→

大分を学ぶ

姫島村編 おおいた姫島ジオパーク

学習・観光、交流にも活用 ジオパークの可能性体感

姫島は、約20万年前の火山活動によってできた島であり、学術的に貴重な地質遺産として残っています。それが評価され地球活動の遺産を持つ自然公園として「日本ジオパーク」に昨年認定されました。島形成の歴史に触れて、姫島の地域資源を感じようとジオパークを巡りました。

観音崎は島内随一の景勝地で、全国的に珍しい乳白色の黒曜石断崖が、高さ40メートル、幅一200メートルに及んで聳えに囲まれた観音崎火口が望め、かつての火山活動の名残を見ることができます。観音崎一帯は姫島の黒曜石産地として2007年に国の天然記念物に指定されています。東九州を中心に中国地方、四国地方など広範囲の遺跡で発見されており、千人堂では大きな黒曜石に触れ、かつて古代の人々が石器の材料として黒曜石を求めて姫島を往来した交流活動を想像しました。観音崎から北浦の神合を望むと、高潮や大しけでも決して海水に浸かることがない姫島七不思議の一つである浮洲が見えます。

この周辺海域も直径700メートルの姫島最大の浮洲火口やいくつかの火口が点在すると教えてもらい、姫島と火山の深いつながりを感じました。

その他、海岸線沿いのひのしまブルーラインには、地殻変動の影響を受けた地層内に唐草状のような模様が現われた地層、層内褶曲や風雨の浸食作用で生み出された奇抜な地層の断崖、鷹巣巣を見学し、島民が日々利用する「柏子水」では冷水を口に含み、姫島の味を体感しました。

ジオパークは、地球活動の遺産を調査研究だけでなく学習・観光、交流へ広げていくことで地域の活力を生みだすことができると期待されています。今回、私たちは姫島ジオパークを火山活動によって造られた自然の芸術作品、地球のアートとして印象を抱きました。島の地域資源としてこの新たな価値を見出す姫島ジオパークに可能性と期待を感じました。

取材
3年
川野はづき
結城宏文

国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY
□旦野原キャンパス 〒870-1192 大分市大字旦野原700番地
□挾間キャンパス 〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地
□王子キャンパス 〒870-0819 大分市王子新町1番1号